

国際会議「シリア世界遺産の次世代への継承を目指して —パルミラ 奈良からのメッセージ」に参加して

牧野 真理子

Notes on the International Conference “Saving the Syrian Cultural Heritage for the Next Generation:
Palmyra – A Message from Nara”

Mariko MAKINO

キーワード：国際会議、シリア、文化遺産、世界遺産

Key-words: international conference, Syria, cultural heritage, World Heritage

はじめに

2017年7月11日（火）から7月13日（木）の3日間、奈良春日野国際フォーラムにて、国際会議「シリア世界遺産の次世代への継承を目指して—パルミラ 奈良からのメッセージ」が開催された（図1）。この会議は、シルクロードが結ぶ友情プロジェクト実行委員会、及び奈良県立橿原考古学研究所の主催のもと、内戦が続くシリアで、世界遺産パルミラ（Palmyra）に代表される破壊された文化遺産の効果的な保存と次世代への継承に向けて、日本を含めた国際社会の今後の方策を議論することを目的として開催されたものである。会議には、シリア古物博物館総局、日本や欧米のシリア考古学専門家や保存・修復専門家、UNESCO等の国際機関が参加し、意見交換を行った。筆者も参加する機会をいただいたので、ここで会議の概要と内容について報告させていただく。

会議の概要と開催の経緯

この国際会議は、日本政府が国連開発機構（UNDP）に資金を拠出し、奈良県立橿原考古学研究所が中心となって実施する予定である、文化遺産分野のシリア人専門家人材育成事業の一環として開催されたものである。「シルクロードが結ぶ友情プロジェクト」と名付けられたこの事業では、今回の国際会議開催の他、シリア人専門家を対象とした日本、及びベイルート（レバノン）での研修、UNDPを通じた文化遺産保護・記録作業用機材供与の実施等が予定されているという（西藤 2017: 89）。

2011年から6年間以上も内戦の続くシリアでは、多くの人命が失われるとともに、文化遺産も深刻な被害を受けている。そのような内戦下でも、シリア古物博物館総局をはじめ、シリア国内各地で文化遺産保護に尽力するシリア

の人々の懸命な活動の様子が報告されてきた。今回の支援事業は、シリア人専門家の能力強化を図ることで、さらなるシリアの文化遺産保護につなげようとするものである。2011年以降も日本政府はUNDPを通じてシリア支援事業を行ってきたが、文化遺産分野の専門家の人材育成に主眼を置いた事業は今回がはじめてのものと言えるだろう¹⁾。

会議のタイトルが物語るように、今回の会議で中心となったテーマは、世界遺産パルミラ遺跡の将来についてであった。2015年5月にパルミラに侵攻したISISは、その後バールシャミン神殿、ベル神殿、記念門、塔墓といったパルミラ遺跡の主要なモニュメントを爆破し、インターネットを通じてその様子を世界中に喧伝することで、国際社会に大きな衝撃を与えた。その後、パルミラの遺跡をめぐっては、政治的な思惑のもとで、遺跡の修復・再建を急ぐかのような動きがあり、修復に対して慎重な姿勢を見せる専門家達の間で、遺跡の将来を案ずる声があがっていた。



図1 奈良春日野国際フォーラム

とりわけ、2016年3月27日のシリア政府とロシア軍によるパルミラ解放の直後、ロシアがパルミラの修復に積極的な姿勢を示すと²⁾、ロシアがパルミラを政治利用していると批判する意見や、ロシア主導で、修復が性急に進んでしまうことを懸念する声がメディアや専門家の中からあがった³⁾。世界中のシリア考古学研究者によって結成されたシリーン (shirīn) は、UNESCOとロシアの対応が様々な憶測を生んでいることに言及し、UNESCOが政治的中立な団体として機能するように望むとともに、パルミラの修復については、シリアの人々の意思決定における自立性が保障され、かつ国民的合意のもとで決定されなければならないと主張する声明文を出していた (al-Maqdissi et al. 2016)⁴⁾。

他方で、最新技術をもって、破壊されたパルミラの文化遺産を蘇らせ、テロリストによる文化遺産破壊に対抗する取り組みも国際社会の中で注目されつつあった。デジタル考古学研究所 (The Institute for DIGITAL ARCHAEOLOGY) は、ISISによるパルミラ遺跡への破壊行為の直後、UNESCOとシリア古物博物館総局の協力のもと、特殊なカメラで撮影・収集した3Dデータをもとに、破壊されたパルミラ遺跡の記念門をエジプトの大理石を使用して、3分の2のスケールで復元してみせた⁵⁾。復元された記念門は、2016年4月のロンドン・トラファルガー広場での展示を皮切りに、9月にはニューヨーク、2017年2月にドバイの第5回ワールド・ガバメント・サミット、そして3月にはフィレンツェのG7文化大臣会合の場で展示されている。復元された記念門をシンボルに、テロリストに屈しないという姿勢を示し、国際社会の団結を訴える彼らの取り組みは、メディアからも賞賛されている⁶⁾。

世界遺産パルミラの今後の行方が注目される中で開催された今回の国際会議は、各国のパルミラ専門家とシリア古物博物館総局が一堂に会し、将来的な修復の可能性も含めた今後の方策を議論する機会を提供することとなった。

会議の内容

会議自体は、1日目のオープン・シンポジウム「シリア文化遺産の保護と日本の役割」、2日目の専門家パネル「パルミラ遺跡の現在から将来へ」、3日目のシンポジウム「次世代のためのシリア文化遺産保護」から構成され、4日目には吉野方面へのエクスカージョンが実施された (表1)。以下、会議の内容について順を追って見て行きたい。なお、会議開催中はサイドイベントとして、同フォーラム会場の中で、アレppo石けんや刺繍工芸品、オリーブオイルといったシリア関連物品の販売や、写真・ポスターの展示が行われていた。

1. オープン・シンポジウム

「シリア文化遺産の保護と日本の役割」(1日目)

荒井正吾奈良県知事の開会挨拶、滝沢求外務大臣政務官の来賓挨拶で、シンポジウムが開始された。記念座談会「シリア文化遺産の保護と日本の役割」では、黒木英充氏の司会のもと、青柳正規元文化庁長官、『テルマエ・ロマエ』等の作品で知られるマンガ家のヤマザキマリ氏、そしてダマスカス市古物博物館局のマフムード・ハムード (Mahmoud Humud) 氏がパネリストとして登壇した。内戦前のシリアの様子や、シリアの文化・歴史が持つ魅力について、さまざまな切り口で聴衆に語りかけた。座談会終了後には、日本の伝統芸能の一つである狂言演目が来場者に披露された。

2. 専門家パネル

「パルミラ遺跡の現在から将来へ」(2日目)

『パルミラで何をしてきたか』

ミハウ・ガウリコウスキ (Michal Gawlikowski) 氏の進行のもと、長年パルミラ遺跡でシリア古物博物館総局と合同調査を行ってきた各国 (ポーランド、ドイツ/オーストリア、イタリア、日本、ノルウェー) の調査隊、及びパルミラ古物博物館局が、パルミラにおける2011年までの学術調査の成果と文化財保護の取り組みについて報告した。内戦が始まってからは、各隊ともに現地調査は中断している状況であるが、現在も研究を継続するとともに、これまでの調査成果の公開に努めていること等が報告された。

『パルミラの未来に向けて』

このセッションでは、パルミラ遺跡の被害状況が共有されるとともに、今後パルミラ遺跡の将来に向けて何がなされるべきかが議論された。進行は、アンドレアス・シュミット=コリネ (Andreas Schmidt-Colinet) 氏が担当した。登壇者による発表後に行なわれたオープン・ディスカッションでは、会場からも質問を受け付けた。

ワリード・アサド (Waleed Asa'ad) 氏は滞在先のフランスからビデオメッセージを寄せ、パルミラでの今後の活動は十分な再建計画をもとに開始されるべきであるとし、そのためには科学的な手法に則った、遺跡現況の仔細な記録化・保存が用意される必要があると説明した。また、国内外の調査隊と協力して現地スタッフの能力強化を図ること、パルミラの人々の文化遺産保護に関する意識向上に取り組むこと、事業実施前に法的な合意がなされることが必要であると述べた。

フマーム・サアド (Houmam Saad) 氏は、2015年のISISのパルミラ侵攻前に、シリア古物博物館総局が行なった文化遺産を保護するための緊急的な避難措置の様

表1 会議プログラム（所属役職等は会議開催当時）

11 JULY OPEN SYMPOSIUM: PRESERVING SYRIAN CULTURAL HERITAGE AND THE ROLE OF JAPAN	13 JULY SYMPOSIUM: SAVING THE CULTURAL HERITAGE FOR THE NEXT GENERATION
14:00-14:10 Opening Statement by Mr. Shogo Arai, Governor of Nara Prefecture, Japan	9:30-9:40 Opening remarks Dr. Akira Tsuneki, Tsukuba University, Japan
14:10-14:20 Speech by Mr. Motome Takisawa, Parliamentary Secretary for Foreign Affairs, Japan	9:40-12:00 Syria Revives through Preserving its Cultural Heritage Facilitator: Dr. Akira Tsuneki, Tsukuba University, Japan Panelists: Dr. Ahmad Deeb, DGAM, Syria and Dr. Houmam Saad, Labex Resmed, Université Paris-Sorbonne, Syria/France "Aleppo Citadel project" Dr. Kosuke Matsubara, University of Tsukuba, Japan "Using historical heritage for the revival of Aleppo" Prof. Hidemitsu Kuroki, Tokyo University of Foreign Studies, Japan "Aleppo in the Syrian history" Dr. Mahmoud Humud, Damascus Department of Antiquity, Syria "The Maalula project" Dr. Jacques Seigne, CNRS, France "Technology alone is not enough. Palmyre -and Syria- will need trained people" Prof. Maria Concetta Laurenti, ISCR, Italy and Antonio Iaccarino Idelson, Equilibrarte LLC, Italy "3D modeling and printing techniques used to restore Palmyra busts destroyed by ISIS: An overview on Italian methods and approach." 11:40-12:00 Open Discussion
14:30-16:15 Preserving Syrian Cultural Heritage and the Role of Japan Facilitator: Prof. Hidemitsu Kuroki, Tokyo University of Foreign Studies, Japan Panelists: Dr. Maamoun Abdulkarim*, Director General of Antiquities and Museums, Syria Dr. Masanori Aoyagi, Former Commissioner for Cultural Affairs, Japan Ms. Mari Yamazaki, Comic artist, Japan	12:00-13:30 Lunch
16:15-16:30 Coffee Break	13:30-14:40 Voices of the Young Researchers for the Future of Syrian Antiquities Facilitator: Dr. Hiroyuki Aoyama, Tokyo University of Foreign Studies, Japan Panelists: Mr. Allam Alkazei, University of Tsukuba, Syria/Japan "Future challenges in post-conflict restoration of cultural heritage sites in Aleppo" Mr. Sari Jammo, University of Tsukuba, Syria/Japan "The role of archaeology and cultural heritage in building society: A lesson learned from Japan" Ms. Mariko Makino, Tokyo National Research Institute for Cultural Properties, Japan "Syrian cultural heritage and Japan: Raising awareness in younger generations" Young researchers' proposal for the future of Syrian Antiquities Coffee break
16:30-17:00 Traditional entertainment: Kyogen	14:40-15:00 Saving the Syrian Cultural Heritage for the Next Generation Facilitator: Dr. Samuel Rizk, UNDP Syria, Egypt/Syria Panelists: Dr. Felicia Maynersen, Deutsches Archäologisches Institut, Germany "The archaeological heritage network(ArcHerNet) and 'Stunde Null-A Future for the Time after the Crisis'" Dr. Georgios Toubekis, Aachen University, Germany "New perspectives for safeguarding Syrian cultural heritage for the future" Mr. Ibrahim Hamidi, Asharq Al-Awsat, Syria/UK "Syrian cultural heritage and conflict" Dr. Christina Menegazzi, UNESCO Beirut, Italy/Lebanon "The role of UNESCO for the Syrian cultural heritage" Mr. Futoshi Matsumoto, Chargé d'Affaires and Special Coordinator for Syria, Japan "The Role of Japan for the future of the Syrians" Dr. Kosaku Maeda, Wako University, Japan "Asking the significance of the existence of the cultural heritage"
17:00-19:00 Reception Welcome Speech by Prof. Fuminori Sugaya, Chair of the Executive Committee of the Silk Road Friendship Project & Director of Archaeological Institute of Kashihara, Nara Prefecture Venue: Nara Kasugano International Forum	17:00-17:10 Adoption of "The Nara Message" and closing remarks by Mr. Saito Kiyohide
12 JULY EXPERT PANELS: THINKING ABOUT THE FUTURE OF PALMYRA	18:30-20:30 Farewell Reception
9:30-9:35 Opening remarks Mr. Kiyohide Saito, Archaeological Institute of Kashihara, Nara Prefecture, Japan	14 JULY Excursion to the World Heritages sites (Yoshino area)
9:35-11:50 What we did for Palmyra? Facilitator: Dr. Michal Gawlikowski, University of Warsaw, Poland Panelists: Dr. Michal Gawlikowski, University of Warsaw, Poland "The Polish Excavations in Palmyra, 1959-2011" Dr. Andreas Schmidt-Colinet, Vienna University, Germany/Austria "The Syro-German/Austrian Archaeological Mission at Palmyra 1981-2010" Prof. Maria Teresa Grassi, University of Milan, Italy "Beyond fieldwork: research and studies of the Italian-Syrian joint Mission in Palmyra (Pal. M. A. I. S.)" Coffee Break (10:35-10:50) Mr. Kiyohide Saito, Archaeological Institute of Kashihara, Nara Prefecture, Japan "Archaeological Works by Nara-Palmyra Archaeological Mission in Palmyra from 1990 to 2010" Dr. Jorgen Christian Meyer, University of Bergen, Norway "The Syrian-Norwegian survey north of Palmyra 2008-2011." Mr. Omar Asa'ad, Palmyra Antiquities and Museums, Syria/France and Abdul Baset Kannawi, Palmyra Antiquities and Museums, Syria/Germany "The Initial Procedures Followed for Safeguarding Palmyra Until 2015"	
11:50-13:30 Lunch	
13:30-16:15 Toward the Future of Palmyra Facilitator: Dr. Andreas Schmidt-Colinet, Vienna University, Germany/Austria Panelists: Mr. Waleed Asa'ad, Palmyra Antiquities and Museums, Syria/France "A factsheet of the outline action plan for Palmyra" (Video) Dr. Ahmad Deeb, DGAM, Syria and Dr. Houmam Saad, Labex Resmed, Université Paris-Sorbonne, Syria/France "Recent Palmyra" Dr. Michal Gawlikowski, University of Warsaw, Poland "An outlook into the future" Dr. Andreas Schmidt-Colinet, Vienna University, Germany/Austria "Palmyra's future? The catastrophe, reactions, projects, proposals, suggestions. A personal view" Dr. Maria Teresa Grassi, University of Milan, Italy "Preserving cultural heritage and memory: Some case studies" Mr. Kiyohide Saito, Archaeological Institute of Kashihara, Nara prefecture, Japan "The future of Palmyrene cultural heritage" Coffee break (15:00-15:15) Dr. Jorgen Christian Meyer, University of Bergen, Norway "Thinking about the future of Palmyra: The Norwegian mission" Dr. Pierre André Lablaude, Inspecteur général honoraire des Monuments historiques, France "Should we restore Palmyra?"	
16:15-17:00 Open discussion	

*マアムーン・アブドゥルカリーム氏の出席がかなわなかったため、マフムード・ハムード氏が代わりに登壇した。

子、そして2015年3月のパルミラ解放後に、ICONEMとポーランドの修復家と協力して実施した被害状況調査の内容を報告した⁷⁾。

ミハウ・ガウリコウスキ氏は、パルミラ遺跡の将来的な修復は、現時点で残されている石のみを対象とし、限定的な範囲内にとどめるべきであると主張した。また遺跡は過去に何度も改変、改築されているため、過去の遺跡の状態を知るためには、ホログラム等を使用したヴァーチャルな手段を採用するほうが有益であるとした。

アンドレアス・シュミット＝コリネ氏は、破壊状況を科学的手法で、詳細に記録することが前提であるとした上で、将来的な再建についてはシリア古物博物館総局とパルミラの人々が決定権を持つので、まずはパルミラの人々を町に戻し、彼らへの経済的・人的援助の提供を優先して行うべきであるとした。

マリア・テレーザ・グラッシ (Maria Teresa Grassi) 氏は、パルミラ遺跡の再建は単なる物質的な再建にとどまらず、パルミラの人々の記憶を再建する行為でもあると述べ、戦争や災害で破壊された文化遺産に対して、人々の記憶と歴史を記録するという観点から、イタリアが過去にどのようなアプローチを採用してきたのかについて紹介した。

西藤清秀氏は、榎原考古学研究所が進めてきた、パルミラ遺跡の建造物の3Dレーザー計測について紹介し、それらが将来的な修復・復元の際に役立つ、貴重なデータになりうると説明した。パルミラ遺跡の再建が、パルミラの人々や専門家の声を無視して進められそうになっている状況を懸念し、破壊状況の仔細な調査と記録がなされた上で、それに基づいて、将来的な修復・復元については、シリアの中で国際社会も含めて、時間をかけて議論すべきであるとした。

ヨルゲン・クリスティアン・マイヤー (Jorgen Christian Meyer) 氏は、遺跡の修復はシリア社会全体の復興と連携していく必要があることを強調した。また長期的に遺跡を保護していくためには、パルミラの地域社会が遺跡から経済的な恩恵を得ることができるよう、観光分野を再興させることが重要であり、その手段の一つとして、パルミラの人々が望むのであれば、パルミラ遺跡の再建も可能性の一つとして検討されるべきだと述べた。

ピエール・アンドレ・ラブロード (Pierre André Lablaude) 氏によれば、我々が最初に検討すべきなのは、「修復すべきか?」という問ではなく「修復できるのか?」という問であるという。破壊状況を正確に把握した上で、技術的観点から修復について検討することで、実行可能な選択肢が明らかになり、理論的な考察が可能になると述べた。これまでパルミラ遺跡では、現地に残る石材を組み立てる、いわゆるアナスタイローシスの方法で修復を行なっ

てきたが、ISISによる近年の破壊の規模を考慮すると、この修復方法の適用については技術的懸念があり、修復によってこれまでのパルミラ遺跡とは異なるイメージを人々に与えてしまうかもしれないと説明した。

現時点でパルミラの遺跡の修復について結論を出すことは、時期尚早であるというのが登壇者達の見解であった。将来的な修復の可能性については、考え方がわかれたものの、次の3点については考えを同じくしていたようだ。

- (1) 遺跡の破壊状況の正確な調査・記録が前提条件かつ最優先事項であり、その後に技術的な検討、修復の具体的な提案が可能になる。
- (2) パルミラ遺跡の物理的な修復だけが先行するような事態は避け、遺跡の保存を担うパルミラの人々の経済・社会的な復興とパルミラ遺跡の復興を連携させるとともに、パルミラ遺跡を長期的に保護するために、地域の人々が遺跡から恩恵を受けられるような持続可能なシステムの構築が必要である。
- (3) パルミラ遺跡の将来についての最終的な決断に際しては、パルミラの人々、及びシリア古物博物館総局の意向が最優先される。

結論を急がず、シリア古物博物館総局を中心に、引き続き関係者が時間をかけて、議論を重ねるべき問題であるという雰囲気でのこのセッションは終わった。

パルミラ遺跡の修復についての議論に並行して、世界遺産の再建にあたっての国際的な基準作りが進展することも期待される。これまで世界遺産条約履行のための作業指針の中では、考古遺跡や歴史的建造物の再建は、その遺産の真正性を損ないかねないとして、例外的な場合のみに限られるとされてきたが、近年世界遺産が過激派組織等によって意図的に破壊されるケースや、自然災害で破壊されるケースが増加していることを背景に、UNESCOは世界遺産の再建やそのプロセスが、コミュニティや人々の平和構築を促すツールになりうるとして、再建という選択肢を積極的に認めつつある。そのようなUNESCOの方針転換によって、世界遺産に異なる修復基準が適用されかねないとして、現在、新たな国際基準の作成が求められている (Cameron 2017: 59)。その点において、後述するゲオルギオス・トゥベキス (Georgios Toubekis) 氏の発表の中で言及されたように、ICOMOSによる「世界文化遺産のトラウマ事態からの回復とリコンストラクションに関するガイダンス文書 (ICOMOS Guidance on Post Trauma Recovery and Reconstruction for World Heritage Cultural Properties)」(ICOMOS 2017) や、後続プロジェクトとして作成を進めているという各国の被災史跡再建の事例集は、パルミラ遺跡も含め、世界遺産の将来的な再建の可能性と、それに関わる修復計画を考える上では、重要な指針

となるかもしれない⁸⁾。

セッションの中では、シリアの文化財の海外への不法な流通についての情報も共有された。法律で規制しようとしても、多くの場合、取引は法の抜け道を突き、表立っては行なわれないので、各国ともに有効な対策が取れていないことを憂慮していた。シリアの遺跡で不法に盗掘された考古遺物や、博物館施設等に収蔵されていてもインベントリー化されていない文化財については、シリアを原産国と立証することが難しいという問題もあり、この点については、後述するジャック・シーニュ (Jacques Seigne) 氏の発表の中にもあるように、シリアの文化遺産に関するデータのアーカイブ化と、そのアーカイブが一刻も早く税関をはじめとする各国の然るべき機関に共有されるよう期待したい。

登壇者からは、法で取り締まることには限界があるため、買い手側の認識を変える必要性が訴えられた。海外の古美術市場に、シリアの文化財への高い需要があることが、シリア国内で盗掘や略奪といった行為が止まない原因であり、紛争下の国々の文化財が海外に不法に持ち出されることが助長されないよう、各国 (買い手側) が文化財の不法輸出入の問題について意識啓発活動を積極的に行っていくべきだといった意見が出された。

3. シンポジウム

「次世代のためのシリア文化遺産保護」(3日目)

『文化遺産保護を通じたシリアの再生』

このセッションでは、パルミラ以外のシリアの文化遺産の被害状況と保護の取り組みが紹介されるとともに、シリア文化遺産保護に向けての課題や、最新の技術が紹介された。

常木晃氏による3日目全体の趣旨説明の中では、2016年度に筑波大学が実施した文化庁の受託事業の中で、世界遺産「シリア北部の古代村落群」の構成資産であるカルブ・ローゼ (Qalb Loze) の教会遺跡を対象に、3Dイメージを使用した緊急的記録作業を現地の考古学者と協力して進めていることが報告された。

アレppo城の現況、及びシリア古物博物館総局が現在進めている破壊状況調査・記録化の進捗状況について、フマーム・サアド氏が説明した。発表の中では、アレppo城内部の最新の3Dモデルの映像が公開された。

今後のアレppoの旧市街における、歴史的遺産の保存・活用のバランスの取れた戦災復興都市計画の在り方について、松原康介氏が、日本の戦後復興の事例等を交えつつ検討した。

黒木英充氏は、シリアの歴史、そして世界史上でアレppoが重要な役割を果たしてきたことを説明し、アレppoの

再興は人類が取り組むべき課題であると強調した。

ダマスカスの北東に位置する町マアルーラの現状について、マフムード・ハムード氏から報告があった。マアルーラでは、東方典礼カトリック教会の修道院など、重要な宗教的建造物を含む歴史的地区が深刻な被害を受けたという。シリア古物博物館総局は、マアルーラでの修復を開始しており、発表では、歴史的地区、聖サルキスバックス修道院、聖テクラ修道院の修復作業の様子が紹介された。

ジャック・シーニュ氏は、修復研究の前提条件となるアーカイブを再構築すること、将来の文化遺産保護に備えてシリア人専門家の人材育成を行うこと、の2点が今後必要であると述べた。特にアーカイブの再構築に関しては、国際的なレベルで行われるべきであり、これらのアーカイブは、修復に役立つだけでなく、シリア国外の美術市場に散在しているシリアからの盗難文化財の由来を立証する上で有効だとした。

アントニオ・ヤッカリーノ・イデルソン (Antonio Iaccarino Idelson) 氏らは、イタリアの修復基準を満たしつつ、パルミラ出土胸像を復元するために考え出した3Dモデリングと3Dプリント技術を応用した新たな修復技術を紹介した。また戦争時や災害時の文化遺産の破壊には共通する問題があるとして、ローマ修復研究所が実施している被災史跡でのプロジェクト事例を紹介した。

このセッションで中心となったのは、世界遺産アレppo (Aleppo) の状況であった。アレppoでは、5年間にわたって反体制派と政府軍による戦闘が繰り返され、多数の文化遺産の被害が報告されている。また街全体が文化遺産でありながら、人々の居住空間でもあるアレppoの旧市街は、考古遺跡以上に内戦後の開発のプレッシャーにさらされることが予想され、戦後復興を見据えて、歴史的建造物や文化遺産の保存について、早急に策を練ることが求められているだろう。内戦後復興を遂げたレバノン・ベイルート旧市街でも、復興の過程で、多数の文化遺産が失われたこと、またその意思決定のプロセスが明確でなかったことが指摘されており⁹⁾、松原氏や次のセッション中で、アッラーム・アルカズィ (Allam Alkazei) 氏が言及したように、過去の事例を検討し、今後に備え準備を進めることが必要となるだろう。

『シリア文化遺産の未来への若き研究者の声』

このセッションでは日本で都市計画や考古学を学ぶシリア人留学生と、文化遺産保護にかかわる日本の若手が、文化遺産の将来について語り、その保護について提言を行った。進行はシリア政治学者の青山弘之氏が担当した。

アッラーム・アルカズィ氏は、ベイルートの再開発について考察した自身の研究をもとに、今後アレppoの復興プ

ロセスの中でどのような課題が予想されるか、都市計画の観点から説明し、バイルートの経験から学ぶことが必要だと述べた。

サリ・ジャンモ (Sari Jammo) 氏は、シリアの人々の文化遺産保護への関心を高めるためには、日本の博物館が行う教育普及活動や、地域社会を巻き込んだ文化遺産保護の取り組みがモデルになるのではないかと提案した。

筆者は、これまでの日本によるシリアでの考古学調査の歴史や2011年以降のシリア文化遺産保護活動を概観するとともに、今後もその協力関係を継続させ、シリア及び日本の若い世代への意識啓発の取り組みが必要であることを説明した。

今後もシルクロードで結ばれたアジアの国々の一員として、日本とシリアの知識・技術面での交流や、協力関係が継続されることを期待する旨がセッション最後のメッセージの中で述べられた。

『シリア文化遺産の次世代に向けた保護』

このセッションでは、人類にとっての文化遺産の存在意義を再考するとともに、そして今後のシリアの文化遺産に対して、国際社会は何をすべきかが議論された。UNDPシリアのサミュエル・リズク (Samuel Rizk) 氏が進行役を務めた。

フェリツィア・マイナーセン (Felicia Maynersen) 氏は、ドイツ外務省が出資し、ドイツ考古学研究所が核となり進めているネットワーク構築事業、ArchHerNet (考古遺産ネットワーク) について紹介した。この事業はドイツの文化遺産関連機関による世界各地の文化遺産研究や事業を統合することを目的としている。現在は、シリア、イラク、ヨルダン、レバノンといった中東の国々を対象として、人材育成、研修、意識向上、デジタルデータ群とシリアの遺産目録の作成を目指しているという。

ゲオルギオス・トゥベキス氏は、保存修復に関わる真正性の概念が、奈良ドキュメントの採択以降、多様性をもってきたことに言及しつつ、アフガニスタン・バミヤン (Bamiyan) で文化遺産保護に携わった自身の経験に基づいて、復興事業の中では、文化遺産が地域の人々のアイデンティティの再構築に果たす役割を尊重すべきであると述べた。そのためには、戦後の都市・文化景観の復興事業に先立って、最新のマッピング技術等を利用し、文化遺産分野も盛り込んだ包括的な地域計画を用意することが実務レベルでは必要だと説明した。

ジャーナリストのイブラヒム・ハミーディ (Ibrahim Hamidi) 氏は、紛争下という状況では、人々は生き延びることに精一杯で、文化遺産保護に関心を払う余裕はなかったという厳しい現実を指摘した。一方で、政権派や反

体制派といった政治的立場に関わらず、一般に多くのシリア人は文化遺産を保護したいという思いを共有しているため、今後の文化遺産保護の取り組みが、異なるグループの人々をつなぐブリッジになり得ると期待を寄せた。また、ハミーディ氏は、シリア内戦終結を目指した国連仲介のシリア和平協議の中では、文化遺産についてはほとんど焦点が当てられていないことを指摘し、協議の中でより取り上げられるよう、政治の場で文化遺産保護の重要性をアピールすることが必要であると述べた。

UNESCO バイルート事務所のクリスティーナ・メネガッツィ (Christina Menegazzi) 氏は、UNESCO が2014年3月から欧州連合とフランダース政府、及びオーストリア政府による拠出金をもとに、取り組んでいる「シリア文化遺産の緊急保護」プロジェクトについて説明した。

シリア特別調整官・駐シリア臨時代理大使の松本太氏は、明治維新後の近代化を成功させ、第二次大戦後に大きな復興・成長を遂げた日本の姿が、内戦後のシリアを考える上で、参考になるはずだと述べ、今後も日本がシリアの人々に対して支援を続けていくことを力強く語った。

タリバンにより大仏が破壊されたアフガニスタン・バミヤンで長年文化財保護活動に尽力してきた前田耕作氏は、文化遺産の破壊や暴力という受難に遭遇しているこの時代だからこそ、文化遺産の存在意義について改めて問うべきだとセッション全体を締めくくった。

会議の最後に、西藤氏から今後のシリア文化遺産保護への提言として、本会議で採択された奈良メッセージが読み上げられた。奈良メッセージの中では、文化遺産保護に関わる一連の UNESCO 関係条約、そしてイラク及びシリアから不法に持ち出された文化財の取引等を防止するための国連安保理決議第2199号、紛争下での文化財保護に関わる国連安保理決議第2347号への支持が表明されるとともに、今後の破壊状況の記録作業、及び保存修復作業に携わるシリアの人々に対して、研修の実施や、最新技術・機材の提供を通して支援していくことが、高らかに宣言された。

おわりに

以上、会議の概要について報告させていただいた。今回の会議では、今後もシリア古物博物館総局を中心に、国際社会が協働して、パルミラ遺跡をはじめ、シリアの文化遺産保護に取り組んでいくことを改めて、確認できたようだった。

おそらく、パルミラをはじめシリアの文化遺産が抱える課題は、イラクやイエメンといった他国における紛争下の文化遺産保護にも共通する点を含んでいる。紛争下の文化遺産保護に国際社会がどう取り組むかを考える上でも、この会議の成果は注目すべき議論の内容を提供したのではな

いだろうか。

個人的には、シリアが抱える内戦という事情もあり、政治的立場を越えて、文化遺産保護に向けて協働することの難しさを改めて感じた会議でもあった。会議の中で、イブラヒム・ハミーディ氏から、シリア国内には反体制派等の勢力下にあり、アサド政権の統治が及んでいない地域が存在している事実が指摘されるとともに、それらの地域に所在する文化遺産を保護する上で、今後国際社会が協働するカウンターパートはシリア古物博物館総局に限定されるべきなのか、という問が投げかけられた。実際にイドリブ県等では、シリア古物博物館総局とは別の団体が、保護活動に取り組んでいるが¹⁰⁾、シリア国内の政治事情を考慮し、UNESCO ベイルート事務所によるプロジェクトの多くは、シリア古物博物館総局を対象に限定されている状況である。内戦という複雑な政治状況の中で、シリアの文化遺産保護という一つの目標に向けて、協力関係を築くことができるか、今後の大きな課題であると感じた。

今回の会議の開催、および研修事業の実施が決定したのは、日本によるシリアでの調査研究活動の歴史に加え、2011年以降も様々なプロジェクトを通して、日本の専門家がシリアの文化遺産保護に対する支援事業を実施し、シリア古物博物館総局と信頼関係を積み重ねてきたことの結果なのだろう。会議中には、シリア古物博物館総局から、主催者をはじめとし、日本の研究者への感謝の言葉が何度も述べられていた。今後も日本によるシリア文化遺産保護事業が継続されることに期待したい。

註

- 1) シリアでの文化遺産に関係する UNDP の事業としては、社会インフラ再建の一環として、戦闘で破壊されたホムスの旧市街市場の瓦礫等撤去事業や、マアラーラの歴史的地区修復事業等が報告されている (UNDP Syria 2017)。
- 2) 3月27日にロシアのプーチン大統領は、UNESCO のイリーナ・ボコバ事務局長とパルミラの修復について議論し、エルミタージュ博物館をはじめ、ロシア側に協力の用意があることを伝えていた (UNESCO 2017a)。パルミラ解放の直前にも、エルミタージュ博物館館長がパルミラ修復に意欲を示す発言をしていることをロシア政府系メディアが報道している (Yakovleva 2016)。また、UNESCO の第199回執行委員会 (2016年4月4日) では、パルミラやその他のシリア世界遺産保護における UNESCO の役割に関するロシアの決議案が承認された (UNESCO 2017b)。
- 3) タイムズ紙やドイチュエ・ヴェレ (DW) は、パルミラに遺跡の「ディズニールランド」が建設されようとしているとロシアに批判的な専門家の声を紹介している (Trew 2016; Oelze 2016)。2016年5月に、ISIS の支配から解放されて間もないパルミラ遺跡の円形劇場の中で、ロシアがマリインスキー劇場管弦楽団による演奏会を開催したことや、パルミラ遺跡内に新たな軍事基地を建設し、遺跡にさらなるダメージを加えていることに触れ、ロシアの対応が矛盾していることを指摘している。

- 4) 声明文は、シリーンのウェブサイトから閲覧可能である。2016年4月13日には、シリア古物博物館総局総裁のマアムーン・アブドゥルカリーム氏も声明文を出しており、その中では、今後のパルミラにおける計画は、これまでのように国際社会と協力し、国際的基準、国際条約を考慮した上で、行なう用意がある、と述べられていた (Abdulkarim 2016)。
- 5) ハーバード大学とオックスフォード大学のメンバーによって、2012年に設立された団体である。ドバイ首長が設立したドバイ・フューチャー・ファンド (Dobai Future Fund) やブリティッシュ・カウンシルによって2011年に設立された、中東・北アフリカ諸国の文化遺産プロジェクトの助成を目的とした文化遺産保護基金 (Cultural Protection Fund) 等がデジタル考古学研究所のプロジェクトの出資元となっている。
- 6) ニューズウィーク (US版) は、第二次世界大戦中ナチスによる破壊から美術品を守るために美術品の奪還・救出を試みた特殊部隊 (「モニュメンツ・マン」) になぞらえ、「新しいモニュメンツ・マンが ISIS を出し抜く (The New Monument Men Outsmarts ISIS)」と題した記事で、デジタル考古学研究所のプロジェクトを紹介している (Karmelek 2015)。
- 7) この時の様子は、フマーム・サアド氏やポーランド人修復家らが登壇した、東京国立博物館平成館大講堂 (2016年11月30日) と奈良県東大寺金鐘ホール (2016年11月23日) で開催されたシンポジウム「シリア内戦と文化遺産—世界遺産パルミラ遺跡の現状と復興に向けた国際支援—」の中で、詳しく報告されている (西藤ほか 2017)。
- 8) 本ガイダンス文書は、ICOMOS のウェブサイトから入手可能である。
- 9) 古代オリエント博物館主催の特別講演会「危機にひんするシリア文化遺産の未来を考える—文化財博物館総局職員をむかえて—」 (2016年9月3日) での、レバノン大学教授のジャンニ・アブドゥル=マッシーハ (Jeanine Abdul Massih) 氏による発表「レバノンからみたシリア文化遺産の未来」の中でも、ベイルートの再開発工事で、考古遺跡や歴史的建造物が破壊の危機にある状況が共有された。フェニキア時代の貿易港の遺跡や、ローマ時代のヒッポドロームの取り壊しを命じる政府決定に対して、市民団体や考古学者から反対する声があがっている。
- 10) 例えば、イドリブ文化財センター (Idleb Antiquities Center) という団体が、文化遺産保護活動に取り組んでいる。彼らの活動は、Facebook ページで発信されている。

参考文献

- Abdulkarim, M. 2016 *Statement: The Road to Resurrecting Palmyra*. 13th April. <http://www.dgam.gov.sy/index.php?d=314&id=1968> (2017年11月20日閲覧)
- al-Maqdissi, M., F. Braemer, M. Gawlikowski, M. Lebeau, A. Schmidt-Colinet and the Members of the Board of Shirin-international and Directors of Excavations 2016 *Restoring Palmyra: Yes! Hastily: No! A Motion Aimed to Encourage UNESCO to Act as a Neutral Organization*. 16th April. <http://shirin-international.org/wp-content/uploads/2015/03/Palmyra-Motion-Supports.pdf> (2017年11月20日閲覧)
- Cameron, C. 2017 *Reconstruction: Changing Attitudes. The UNESCO Courier* 2: 56-59. <http://unesdoc.unesco.org/images/0025/002523/252318e.pdf> (2017年11月20日閲覧)
- ICOMOS 2017 *ICOMOS Guidance on Post Trauma Recovery and Reconstruction for World Heritage Cultural Properties*. <http://openarchive.icomos.org/1763/> (2017年11月20日閲覧)

- Karmelek, M. 2015 The New Monument Men Outsmarts ISIS. *News Week*. 11th November. <http://www.library.dmu.ac.uk/Images/Selfstudy/Harvard.pdf> (2017年11月20日閲覧)
- Oelze, S. 2016 Ancient city of Palmyra Should Not Just Become Another 'Disneyland'. 1st June. <http://p.dw.com/p/1IyC8> (2017年11月20日閲覧)
- Trew, B. 2016 Plea Not to Create a Disneyland of Relics. *The Times*. 6th April. <https://www.thetimes.co.uk/article/plea-not-to-create-a-disneyland-of-relics-qxk8h1> (2017年11月20日閲覧)
- UNESCO 2017a UNESCO Director-General and President Vladimir Putin Discuss the Protection of Palmyra's Cultural Heritage. 27th March. <http://whc.unesco.org/en/news/1472/> (2017年11月20日閲覧)
- UNESCO 2017b UNESCO Executive Board Unanimous to Protect Palmyra and Other Syrian Heritage. 16th April. <http://whc.unesco.org/en/news/1479/> (2017年11月20日閲覧)
- UNDP Syria 2017 *365 Days of Resilience Inside Syria. UNDP Annual Report Syria 2016*. http://www.sy.undp.org/content/syria/en/home/library/UNDP_SYRIA_ANNUAL_REPORT_2016.html (2017年11月20日閲覧)
- Yakovleva, Y. 2016 Hermitage Director Mikhail Piotrovsky: Palmyra Must be Restored. *Russian Beyond*. 23rd March. https://www.rbth.com/arts/2016/03/23/hermitage-director-mikhail-piotrovsky-palmyra-must-be-restored_578385 (2017年11月20日閲覧)
- 西藤清秀 2017 「シリア・パルミラの現状と復興に向けた取り組み」『季刊考古学』141号 87-90頁。
- 西藤清秀・安倍雅史・間舎裕生(編) 2017 『世界遺産パルミラ 破壊の現場から シリア紛争と文化遺産』雄山閣。

牧野 真理子

東京文化財研究所 文化遺産国際協力センター

Mariko MAKINO

Japan Center for International Cooperation in Conservation,
Tokyo National Research Institute for Cultural Properties